



大麻、覚せい剤、コカイン... これら薬物問題が連日報道されている。彼らは犯罪という枠の中へくみ入れ、専門家が「メス」を「メス」で「意識が弱い」などと言葉を荒らして語る。精神論で片付けられていく薬物問題。いつ、誰が、どこで、失敗した彼らの心の

痛み、その声を拾うのが。薬物依存症... 強迫的依存によって、薬物をやめたくてもやめられない状態になった。WHOの世界保健機関の認定する精神障害である。日本には三百万人ほどの患者がいるといわれている。ほとんどが犯罪者として刑務所、矯正施設に向かう道筋をたどる。しかし欧米諸国ではドラッグコート(薬物専門裁判所)が設けられ、刑務所「犯罪」矯正ではなく、薬物依存症回復プログラム(病氣)治療にシフトした対応が施される。残念ながら、わが国は精神論が根強い。再犯率60%といわれる覚せい剤専犯。繰り返して刑務所に入る人たまたかかわる懲罰官、判事、検事、弁護士、刑務官、保護観察官、そして家族、国家の矯正教育を繰り返して受けても何も変わらないう。という結論に至るには十分時間がたったのではないだろうか。薬物問題に悩む人々がこのような疑問を日々抱えてきた中で、ここ二年、刑務所で行う薬物乱用防止教育をダルク(薬物依存症民間回復施設)が請け負うケースが増えた。

仲間の支えが薬物依存防ぐ



佐々木 広

ほとんどが国家運営である。しかし日本には、そのような施設がダルクという民間施設しかないのが現状である。ダルクとはドラッグ・メスイクシオン・リハビリテーション・センターの略で、現在国内約五十カ所で活動している。当業者活動、つまり同じ仲間を満期出所してダルクのドアをたたいた人が多いことだ。ほとんどが、身寄りのない、行き場のない、そして経済基盤もない薬物依存症者である。そんな人たちが欠々と現れ、現在三十二人が利用する。全員、かつての私の姿である。彼らは薬物依存症者、社会的にみれば犯罪者である。しかし、薬物依存回復プログラムを続けることによって、薬物をやめる、やめた人が、新しくやって来るとやめたい人を手助けする。立ち直った元犯罪者が、現役の犯罪者の更生を支える。なぜならば、薬物依存症者の心の痛みは、薬物依

き、開設した。責任者の私も薬物依存症当業者だ。覚せい剤で逮捕歴三回、受刑歴二回。二〇〇四年にダルクに助けを求め、ダルクに助けられ、薬物をやめることができた。山梨ダルクの特徴は、刑務所を満期出所してダルクのドアをたたいた人が多いことだ。ほとんどが、身寄りのない、行き場のない、そして経済基盤もない薬物依存症者である。そんな人たちが欠々と現れ、現在三十二人が利用する。全員、かつての私の姿である。彼らは薬物依存症者、社会的にみれば犯罪者である。しかし、薬物依存回復プログラムを続けることによって、薬物をやめる、やめた人が、新しくやって来るとやめたい人を手助けする。立ち直った元犯罪者が、現役の犯罪者の更生を支える。なぜならば、薬物依存症者の心の痛みは、薬物依

ささき・ひろしさん 1968年岩手県生まれ。2004年、仙台ダルクに入所、ダルクプログラム開始。その後、ダルク創設者で日本ダルク代表の近藤恒夫氏の秘書を経て、08年、甲府市伊勢4丁目山梨ダルクを開設。